

# 「私、絵と結婚するの」

1950年1月21日、31歳のいわさきちひろは23歳の松本善明と結婚する。その時二人は次のような誓約書を書いた。

- 一、人類の進歩のために最後まで固く結びあつて闘うこと
- 一、健康的な生活をする事
- 一、お互いの立場を尊重し、とくに芸術家としての妻の立場を尊重すること
- 一、建設的な財政を実行すること
- 一、土曜日以上のことを点検すること

三番目の、「とくに芸術家としての妻の立場を尊重すること」という一文からは、ちひろの画家として生きるという決意が感じられる。

いわさきちひろは、東京府立第六高等学校在学中の14歳から、東京美術学校（現・東京芸大）教授で洋画界の第一人者だった岡田三郎助に師事する。女子美術学校の学生や画家志望の年上の女性に交じって、約四年間、毎日のようにアトリエに通いデッサンと油彩画を学んだ。その結果、弱冠17歳にして、当時唯一の女性の公募展だった朱葉会展で主席入選を果たす。卒業のころ、ちひろは絵の勉強を続けようと女子美の願書を取り寄せる。しかし、両親の猛反対にあい進学を断念、絵の道を諦めなければならなくなった。岩崎家三姉妹の長女だったち

Takeshi Matsumoto

## 原案 松本 猛

(美術評論家・作家・ちひろ美術館常任顧問)

ひろは家を継ぐために婿養子を取らねばならない立場にあった。親が決めた相手を好きになれず、抵抗するものの、ついに意に沿わない結婚をすることに。しかし、この結婚は二年も持たずに、夫の自殺という悲劇で幕を閉じた。

戦況悪化の中、ちひろは女子開拓義勇隊の書道教師として満州へ渡ることになる。過酷な開拓団の生活を知り、心身ともに衰弱するが、幸運にも駐屯していた軍の連隊長に救われ、その配慮でかろうじて帰国できる。しかし、帰国後のちひろを待ち受けていたのは東京の空襲だった。家を焼かれ、命からがら生き延びたちひろは実家のあった信州松本へ疎開、終戦を迎える。翌年の一月、松本市で開かれた共産党の演説会に参加したちひろは弾圧にも屈せず戦争に反対していた人がいたことに感銘を受け、初めて自立を決意する。

今回の舞台は、両親の元から一人上京して、画家を目指して格闘している時代のちひろの姿を描いている。タイトルに使った「私、絵と結婚するの」は、戦後ちひろが、妹をはじめ親しい人にいつも語っていた言葉である。この言葉には、一つの意味が隠されている。一つは、最初の結婚で夫を拒み続けた結果、死に追いやってしまったという自責の念から、二度と結婚はしないという思い。もう一つは、家のために好きな絵の道を断念した後悔から、自立した自分の人生では二度と絵筆を離さないという覚悟。善明との誓約書に書き



松本猛 (まつもと たけし)

1951年、いわさきちひろ・松本善明の子として東京に生まれる。東京藝術大学美術学部芸術学科卒業。現在は、美術・絵画評論家、作家、横浜美術大学客員教授、ちひろ美術館常任顧問、美術評論家連盟会員、日本ペンクラブ会員。1977年にちひろ美術館・東京、97年に安曇野ちひろ美術館を設立。同館館長、長野県信濃美術館・東山魁夷館館長、絵本学会会長を歴任。

著書『いわさきちひろ 子どもへの愛に生きて』『母ちひろのぬくもり』(講談社)、『戦火のなかの子どもたち』物語(岩崎書店)、『花と子どもの画家 ちひろ』『安曇野ちひろ美術館をつくったわけ』(新日本出版社)、『東山魁夷と旅するドイツ・オーストリア』(日経新聞出版社)、絵本に『ふくしまからきた子』『ふくしまからきた子 そつぎょう』(絵・松本春野 岩崎書店)、『白い馬』(絵・東山魁夷 講談社)、『りんご畑の12ヶ月』(絵・中武秀光 講談社)『海底電車』(絵・松森清昭 童心社)など。

込まれた言葉は何があっても絵を描き続けるという決意表明でもあった。

ちひろの描く子どもは愛らしくやさしく、水彩の美しいにじみは、人々の心をなごませる。ある意味では、砂糖菓子のように甘く、優しい世界に見える。しかし、ちひろは命の象徴として子どもを描き続けた。それは戦争中にたくさん無垢な子どもが命を奪われていくことを目の当たりにしたからであり、同世代の絵を志していた多くの若者をはじめ無数の命が思い半ばに消えていったことを知っていたからだろう。

『ちひろー私、絵と結婚するのー』は、ちひろが、何を描くかをつかみ取るまでの日々をテーマにした舞台の上で、敗戦後の混乱した社会を必死で生きているちひろを見て、愛らしい絵の向こうにある強さと、思いの深さを感じていただけじゃうれい。

2019年6月24日、父、松本善明は93年の生涯を閉じた。母、いわさきちひろが1974年に55歳で亡くなった時、父は狭山湖畔霊園に母の絵をレリーフにした新しい墓を作った。その時、墓碑に刻んだ「いわさきちひろ」の文字の上に自分の名も彫り込んだ。母が寂しくないようにとの思いからだ。45年の時が経って、二人はいまいっしょに眠っている。

父の最後の公の外出は2018年の前進座の公演『ちひろー私、絵と結婚するのー』だった。感想を聞いたなら、笑いながら「まあ、いいんじゃないか」といった。いま、母に芝居の話をしているのだろうか。趣味は演劇鑑賞と書いていた父だった。